



**Data**

監督: 吉田大八  
 脚本: 楠野一郎、吉田大八  
 原作: 塩田武士『騙し絵の牙』(角川文庫刊)  
 出演: 大泉洋/松岡茉優/池田エライザ/斎藤工/中村倫也/坪倉由幸/和田聰宏/赤間麻里子/佐野史郎/リリー・フランキー/塚本晋也/國村隼/木村佳乃/小林聡美/佐藤浩市/石橋けい/森優作/後藤剛範

## 👁️👁️ みどころ

紅白歌合戦の司会も、『新解釈 三国志』(20年)の劉備玄德役も、はしゃぎすぎ! 私はそう思うが、人気作家・塩田武士が大泉洋を“あてがき”にした本作はクセモノぞろい。そんなキャラが集まる中、諸葛孔明以上の知性派(?)、大泉が次々と仕掛ける“騙し絵の牙”に注目!

もっとも、本作のヒロインは、若く頑張り屋の編集者。社長の急死後、権力闘争に明け暮れる大手出版社の中、彼女の率直なモノ言いは危なっかしいが、正鵠を得ているから、説得力あり! 同社の構造改革、人事刷新、収益改善は進むの?

“退任式”を終えたばかりのトランプの2024年の“大統領復帰”は見通せないが、“騙し絵の牙”を磨きぬいたこのクセモノ男なら権力闘争後の復帰も? さらに、このヒロインが放つ最後の一手は?

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■大泉洋×吉田大八で塩田武士の大ヒット小説を映画に! ■□■

食品会社への大胆不敵な脅迫と、“きつね目の男”。そう聞けば、私たち団塊世代なら誰でも1984年に起きた「あの事件」を思い出す。それを「ギン萬(ギンガ・萬堂)事件」と脚色したうえ、いかにも思わせぶりの「罪の声」をモチーフにした小説が、塩田武士の『罪の声』。それを土井裕泰監督が映画化した『罪の声』(20年)も、なかなかの出来だった(『シネマ47』132頁)。そんな人気作家・塩田武士が、人気絶頂中の俳優・大泉洋を「あてがき」にして書いた小説が『騙し絵の牙』だ。

大泉洋は、2020年大晦日の第71回NHK紅白歌合戦の白組司会に起用されたが、そこでのあまりにはしゃぎすぎた司会ぶりは如何なもの? また、『新解釈・三国志』(20

年)におけるギャグの連発も如何なもの？私はそう思わざるを得ない。しかし、『清須会議』(13年)『シネマ31』174頁)は面白かったし、『探偵はBARにいる』シリーズ(11年、13年、17年)も、松田龍平との絶妙コンビはそれなりの面白さだった(『シネマ27』54頁、『シネマ31』232頁、『シネマ41』未掲載)。

おふざけぶりとはもかく、彼の演技力は折り紙付きだから、そんな俳優・大泉洋を「あてがき」にした小説はきっと面白いはずだが、それは一体どんなテーマ？そう思っていると、『騙し絵の牙』と題された本作は、『崖っぷち出版社で巻き起こる、クセモノだらけの仁義なき騙し合いバトル』らしい。こりゃ面白そう！

## ■□■「薫風社」における専務 vs 常務の対立は？■□■

創業者一代で、零細企業から大企業に急成長する会社はどの業界にもある。現在の出版業界で言えば、一人勝ち状態にある“幻冬舎”がそうだ。しかし、創業者一代だけで急成長させた会社はその承継が難しいうえ、内部紛争が起きれば、大塚家具株式会社における父娘抗争のような大変な事態になってしまう。

本作は冒頭、暗示的な2つのシーンを対比させながら、大手出版社・薫風社を一代で築き上げた創業者・伊庭喜之助が急死するところから始まる。その直後に同社に生まれた“権力闘争”は、東松龍司(佐藤浩市)専務 vs 宮藤和生(佐野史郎)常務の争いだ。宮藤は、一人息子で、次期社長と目されていた伊庭惟高(中村倫也)の後見人的立場だったから、一見、宮藤が優位。しかし、伊庭の妻は後妻で、惟高とは血縁関係がないから、立場は微妙だ。また、伝統ある看板雑誌として文芸誌「小説薫風」を赤字続きの中でも守り続けている宮藤に対し、実力主義で改革派の東松は、外資ファンドの郡司一(斎藤工)の支援も得ながら、何かと不穏な動きをとっていた

本作導入部では、薫風社が大切に扱っている大御所作家・二階堂大作(國村隼)のご機嫌取りばかりしている女性編集長・江波百合子(木村佳乃)らの活動が紹介されるが、こんな旧態然としたやり方では出版業界が取り残されてしまうのは当然。そのため、江波百合子の下で一所懸命、二階堂の小説に朱を入れていた若き編集者の高野恵(松岡茉優)は、“出る杭は打たれる”を地で行くことになってしまう。そんな状況が紹介された後、おもむろに、本作の主人公である速水輝(大泉洋)が登場するが、カルチャー誌「トリニティ」の編集長を務めている速水は東松の腰巾着？

ちなみに、2020年のNHK大河ドラマ『麒麟がくる』の主人公・明智光秀は、織田信長の腰巾着のように働かされていたが、本作の速水は、東松から「サラブレッドのように働け」と激励を受けていた。しかして、そのココロは・・・？

## ■□■出版不況と「取次」制。その理解が大前提！■□■

新型コロナウイルスの被害を最も強く受けたのは観光業界と飲食業界だが、近年ずっと続いている出版業界不況の原因は、言うまでもなくインターネットの普及による紙媒体の減少。確かにそれはそうだが、他方で日本の出版業界特有の制度である「取次」制度をし

っかり理解する必要がある。紙媒体は書籍と雑誌に大別できるが、これを書店で同時に売っているのは日本だけ。それを可能にしているのが「取次」制だが、その仕組みと効用は？

宮藤常務とその忠実な部下である百合子は、「小説薫風」を守り抜くことこそが出版不況の荒波を潜り抜ける道だと主張していたが、東松専務は、速水に対しても「トリニティ」も廃刊の危機にある」と危機感を強調しながら、「新機軸を」と発破をかけていた。さらに彼は、赤字を垂れ流し続けている「小説薫風」の廃止をも射程距離に置いていた。

本作後半のキーワードになる「KIBA 計画」の内容やそのプロジェクトの進展、更には東松専務と外資ファンドとの提携などはすべて現在の出版不況を乗り越え、薫風社を筋肉体質の企業に作りかえていくためだ。したがって、本作のストーリーの軸になる、東松専務 vs 宮藤専務の権力闘争を楽しむ(?)については、その前提として、出版不況の現状と出版業界特有の「取次」制を理解する必要がある。

他方、エンタメ色満載の本作のストーリーを牽引していく健気なヒロイン(?)は、百合子の下で毎日一所懸命原稿に朱を入れている高野恵。“薫風社”の宝”ともいうべき大御所小説家・二階堂の自信満々の新作に対して率直な物言いをしたのが是か非かは難しいところだが、これを専務派で「トリニティ」の編集長である速水が意識的に高野にやらせたとなると……。さあ、ここから超クセモノ男・速水が繰り広げる権謀術策の数々は？

## ■書き手も曲者ばかり！売るアイデアは？新企画は？■

2021年の正月三が日は、コロナ禍の中、巣ごもり色が強まったため、お正月恒例のテレビ番組『芸能人格付けチェック』の視聴率が22.8%に上ったらしい。この番組で否応なく明らかになるのは、一見一流芸能人であっても、音楽はもとより、肉の味もワインの味もわからない三流芸能人が多いこと。本作導入部で「ワイン通」をアピールしていた二階堂も、ある日の速水の仕掛けの前に、その舌は三流であったことが暴露されるので、それにも注目！このように、本作は導入部から名優・大泉洋が演じる速水の曲者ぶりが目立つが、何の何の！『騙し絵の牙』と題された本作では、「トリニティ」の編集長・速水が曲者なら、「薫風社」の書き手となる人物たちも曲者ぞろいだからそれに注目！

高野がいかに編集の仕事に真面目に取り組んできたかは、かなり以前に若い才能として見出していた作家・矢代聖（宮沢永魚）の再起用を巡って中盤から大きな見所になっていくストーリーで明らかになっていく。また、「トリニティ」の表紙に起用したファッションモデルの美女・城島咲（池田エライザ）が「書き手」として意外な才能を持っていることを発見した速水は、彼女の起用について如何なる戦略を？さらに、私は奈良で生まれ、大阪で急成長した「神座（かむくら）」のラーメンが大好きだが、本作にはなぜかその「神座」と名乗る謎の男が登場してくるので、それにも注目！

その他、本作では、終始一貫真面目で正統派の頑張り屋の娘・高野と、ひたすら旧態然とした「薫風社」の体制にしがみついている宮藤常務と「薫風社」の百合子以外はすべて曲者ばかりだから、ストーリー展開の流れに沿いながらその1人1人のキャラに注目した

い。ちなみに、私が本作を試写室で鑑賞したのは1月21日だが、鑑賞後は「映画『騙し絵の牙』ネタバレ回避ご協力をお願い」が配布され、ネタバレ厳禁とされているため、それぞれのキャラの紹介と怒涛のストーリー展開の紹介はこの程度で。

## ■□■トランプはどこへ？高野はどこへ？速水はどこへ？■□■

1月20日のバイデン新大統領の就任式は全世界の注目を集めたが、それを巡って飛び交った“怪情報”の最たるものは、トランプ大統領による“戒厳令”の発令と、バイデン新大統領の逮捕。そんなことが現実起きるわけではないと思いつつ、2万人余の州兵の中にもトランプ支持派がいるのでは？等々の思い、期待(?)もかなりあった。就任式への欠席と、ペンス副大統領をはじめとする多くの側近を失った中での退任式の挙行はいかにもトランプらしいが、マッカーサー將軍の「I shall return (私は戻ってくる)」を彷彿させる、トランプの「我々は何らかの形で戻ってくる」との言葉を私たちはどう理解すればいいのだろうか？

他方、大家家具の“お家騒動”は形の上では娘の大塚久美子が勝利したが、その後の展開を観ていると???本作では、専務派 vs 常務派の権力闘争の図式が示された後、すぐに息子の惟高はアメリカに飛ばされ、東松専務が新社長に就任するから、形の上では専務派の勝利。そして、東松新社長は速水を「サラブレッド」として働かせるべく最大限活用したが、速水は東松新社長の忠実な部下としてサラブレッドのように、収益性の悪い「小説薫風」にしがみつくと宮藤常務を追いつめていくから、最終勝者も東松社長に!?そして、宮藤常務は最終的には退任!?他方では、二階堂まで速水の企画する新たなプロジェクトに引き抜かれたため、編集長の仕事も失い、さらに、宮藤常務の後ろ盾も失った百合子は、総務の仕事に左遷されていくことに。これらすべての騙し絵を企画し実行したのは速水だが、実は高野も意識的か無意識的かは別として、そのプロセスに大きく組み込まれていたことは明らかだ。そんな現実には高野は啞然とさせられたが、利口で現実的、そして頑張り屋の高野の次なる発想は？

本作は1つの結末が示された後の“次なる展開”が面白いので、それに注目!その展開を観ていると、速水はいわば飼い犬の高野に手を噛まれた状態になるわけだが、そこで見せる速水の表情は?さらに、彼が考える次なる企画(騙し絵の牙)は?ここでは、決して敗北していないことを再確認したトランプと同じように、速水の新たな“騙し絵の牙”がちらりほらりと暗示されるので、それに注目!そんな、あれやこれやを考えると、ひょっとして本作にはパート2が?

2021(令和3)年1月25日記